

時の動き

保育園落ちた日本死ね

東京都 保育士

町田ひろみ

保育園問題の拡がり

「保育園落ちた日本死ね」という言葉が日本中を賑している。この言葉に



ついでに首相の答弁を受け「保育園落ちたのは私だ」と国会前行動も行われた。保育園の足りないことが保育士の処遇問題にまで繋がっていることとして「保育園問題」は大きな注目を浴びている。今の待機児問題は日本が子どもを大切にしていなかったことの結果であり、働く女性に対して優しくない国だということの表れだ。

そもそも、待機児問題は今に始まったことではない。待機児を解消するために、認可保育園を作るのではなく、面積基準が足りなければ受け入れ室や廊下なども保育室の面積として含め定員を増やしたり、基準が緩く保育料が

高い認証保育園や無認可保育所に入っていれば待機時のカウントには入れないとして、待機児の数を減らしてきた。保育の質の規制緩和である。日本の不況と相まって働かざるを得ない女性が増え、「保活」という言葉ができるほど保育園に入るのが難しい時代を迎えた。

私は、働かざるを得ない女性が増えただけではなく、日本の戦後の民主的教育が女性の権利意識を成長させ「働きたい女性」も増えたと考えている。そして、残念なことに政治の世界はその女性の意識や日本の現状においておらず、その結果「保育園落ちた



「保育園落ちたの私だ」、国会前の抗議デモ

「日本死ぬ」の言葉が生まれたのではないだろうか。その言葉は強烈であった

かもしれないが、保活をする多くの親たちの共感と呼んだ。親だけでなく、保育園で働く多くの職員の共感をも呼んだのだ。

あの言葉の主の願いは一つだ、保育園をもっと作って欲しいということだけだ。

保育士として30年

私は働いて30年目の保育士である。私の働いている保育園は組合もあり働く条件は整っているほうだ。だからこそ今まで続けてこれたのだ。

「保育は人」という考えで人件費に比重をおいた経営をしてきている。そういう保育園は他にもある。そういう保育園があったからこそ、保育の質の担保もある程度守られてきた。

だが、良心的保育園の経営も頑張る限界がある。保育の質を取れば職員の給与を減らすしかない状況も生まれて

いる。このままでは「保育の質」が崩壊する。

希望は捨てない

だけど、私は希望を持っている。それは、先にも書いたが「保育園落ちたの私だ」と国会前行動が行われたことだ。自分が行動しなければこの保育問題は解決しないことを感じて行動が始まったのだ。その行動は、国会議員への要請行動や署名行動にまで広がってきている。

保護者だけでなく保育園職員も行動を広げている。自分たちで変えるのだという行動が始まったことがこれからの保育問題を大きく前進させてくれることを願っているし、私も行動することを続けていきたいと思う。

(まちだ ひろみ)